

氏名(本籍地)	久野俊彦(栃木県)		
学位の種類	博士(文学)		
報告・学位記番号	乙第211号(乙文第82号)		
学位記授与の日付	平成26年2月24日		
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第2項該当		
学位論文題目	絵解きと縁起のフォークロア		
論文審査委員	主査 教授	博士(文学)	中山尚夫
	副査 教授		河地修
	副査 教授		千艘秋男
	副査 国立歴史民族博物館		
		博士(文学)	小池淳一

#### 【論文審査・審査結果】

本学位審査論文(以下、本論文と略称)は論考14編と資料(翻刻)4編とから成る。序章「絵解きと縁起への視覚一語り・文字・絵画」では本論文全体の基本的な視点として「絵解きと縁起の多様な存在形態を認知して研究対象に即した方法によって解明する」(12頁)と述べられている。その方法は主として民俗学的手法であるが、国文学の知見や宗教学の成果なども縦横に取り込まれており、学際的なものといえる。

第I部「近世の絵解きと縁起」は5章から構成されている。第一章「『親鸞聖人絵伝』の絵解きの書」では『御伝鈔』に収束しない多様な親鸞伝とその絵解きの様相を追跡している。第二章「縁起のメディア—開帳における縁起」は縁起を絵画や宝物の展観によって広めるメディアとしての開帳を具体的に提示、分析する。続いて第三章「宝物の展観と絵解き」では開帳の中で、絵画に描かれたモノと実際の事物とが結びつけられて解説されている姿を確認、検討している。第四章「略縁起の板行」では近世の略縁起を「寺社への信仰を広め参詣者を獲得するのを目的にして、新たに靈験を強調して書かれた説話であるところに価値がある」(89頁)として、その意義を確定し、最後の第五章「略縁起の成立と変化—『愛敬稲荷略縁起』—」では具体的な略縁起の形成と変容について考察を加えている。

第I部は、全体として、近世における絵解きをその基盤や具体的な「場」に即して検討し、さらにそのなかでも略縁起を中心とした展開の過程を考察するものである。視覚に訴える絵解きから近世ならではの縁起の大衆化へと論を進めている。特に開帳という「場」を具体的に復元(48、68、72頁)し、絵画の解説だけでなく、宝物等の解説(本論文では「エトキ」とする。56頁)にも目配りしている点が重要であろう。それは、絵解きを孤

立させないで、寺社の開帳や略縁起の印行と重ね合わせて理解するという文化史的な研究姿勢という事ができよう。また、縁起を文字に表現されたものとして捉えるだけでなく、それらが声となり、上演される姿に着目し、考察していく方法が提示されていると言えよう。

第Ⅱ部「近代に生きる絵解きのフォークロア」は4章から構成されている。第一章「善光寺と高野山周辺の刈萱の絵解き」は、刈萱の絵解きが、長野の善光寺と和歌山の高野山周辺とで行なわれてきていることに注目し、両者を詳細に調査しており、第二章「高野山の刈萱伝説と絵解きの成立」では、高野山周辺の刈萱に関する絵解きの形成を伝説、説教、浄瑠璃、地誌等を探り、近世から近代にかけての唱導活動を多角的に跡づけている。第三章「絵解きの現代的成長—刈萱山西光寺の絵解き」は善光寺門前の長野市西光寺における絵伝と絵解きの相関関係を近世から現代にいたる変転として詳述している。以上は筆者(申請者、以下同)の長年にわたる刈萱の絵解きに関する考究のまとめといえるものである。第四章「地獄絵の唱導と近代文学」は青森県五所川原市金木町の雲祥寺の地獄絵が、作家太宰治の幼少時の心象風景と深く結びついていたことに着目し、さらに太宰文学の読者たちによる地獄絵への接し方、享受の様相を分析している。

第Ⅱ部では、近世から胎し、現代においても何らかの絵解き、もしくはそれに類する行為が行なわれている姿に着目し、それらの形成および変動の理由を文学的な記録をはじめ、地誌や絵本などにも広く目配りして検討を加えている。現存する絵解きや地獄絵を出発点としながら、それを可能にしている諸条件、諸要素を解析しているのである。特に信州と紀州という隔たった地域に展開する「刈萱」の説話をういた唱導を取り上げ、その変遷を解明している点は重要であろう。現代社会における絵画による唱導の手法が文化的な厚みに支えられていることが明らかにされている。これは歴史的には民衆文芸、仏教文学の受容と展開の問題として捉えることができる。惜しまれるのは、鉄道開通の影響(112頁)をはじめとする社会学あるいは観光的な観点が指摘されるにとどまっていることである。そうした見方が分析にあたって加味されれば、より現代性を抽出することができたものと思われる。

第Ⅲ部「縁起のフォークロア」は4章から構成されている。第一章「縁起絵巻の成立—『日光山縁起』」は、日光山の縁起絵巻を素材に地方における縁起とその絵画化、さらにはそうした絵画の中に描かれた民俗を抽出している。第二章「縁起と民間伝承—日光・赤城山麓の神戦伝承」は縁起の中に取り込まれた伝承や縁起の記載が伝承の根拠となっている民俗事例を丁寧に取り上げながら、霊山信仰との関わりに論及する。第三章「縁起と儀礼—素麺地蔵の縁起と日光責め」は日光輪王寺の強飯式「日光責め」を取り上げ、それと関連する縁起が氏家の満願寺周辺にみられることを指摘し、さらにその伝播を考察している。第四章「縁起と民間信仰—『庚申縁起』と庚申信仰の変容」は庚申縁起を詳細に分析した

上で、実際の庚申講における儀礼と、とりわけ礼拝対象や呪歌、禁忌と照らし合わせ、講の変化が縁起にも影響を与えていることを指摘する。

第Ⅲ部は、絵解きから一転して、縁起を絵画、伝承、信仰から照射し、その展開や相互関係を考究している。筆者の認識的方法的基盤が民俗学にあることをよく示している論考が配されていると言えよう。中世日光における絵画工房の存在(186頁)と近世初期の縁起絵巻を用いた絵解きの可能性(190頁)、赤城山麓における神争いに関する伝承の特徴についての具体的な指摘(207～208頁)、縁起説話の伝播が持つ意味(223頁)、三十三本に及ぶ『庚申縁起』の比較とそこに組み込まれている信仰要素の検討(231～232頁)といった丁寧な考察によって、これまでは見過されたり、断片的で意味が不明とされてきた事象が明確に位置付けられている。

この第Ⅲ部では、縁起をテキストとして孤立させて検討するのではなく、絵画や伝説、儀礼、信仰といった関連する文化事象と関連させて分析が行なわれており、その機能や意味、さらには変遷の過程が照射されている。縁起という存在が決して閉じられ、固定したものではなく、成長、変転し、新たに意味を生み出してゆくものであることを示し、そうした縁起を基軸とした文化研究の可能性を示唆しているものと言えよう。

本論文は、第Ⅰ部では近世の親鸞をはじめとする高祖伝の絵解きと開帳活動、第Ⅱ部においては刈萱を中心とする近現代におよぶ絵解き、そして第Ⅲ部は日光山縁起を出発点とする縁起と民俗事象との連関、をそれぞれ主題とするものと大まかに整理することができる。題目の「絵解きと縁起のフォークロア」はこうした絵解きおよび縁起の展開とそこから導き出される研究の集成であることをよく示している。全体として、時代的には中世から現代にいたる長い時間を扱い、そのなかの縁起の展開について多角的な視座から跡づけた意欲的な論文と言えよう。単一の主題や対象によって貫かれたものではない点が、雑然とした印象をあるいは抱かせるかも知れないが、筆者の多角的な問題意識、複眼的なアプローチの手法が集約されたものと前向きにとらえるべきであろう。

本論文の特色およびその意義については以下のようにまとめることができる。

まず、方法的特色としては、第1に、諸資料に対する丹念な読み込みと分析とを挙げるべきであろう。絵解きの諸要素を相互に比較した121～123頁の「絵解き「刈萱」対照表」、庚申縁起の諸要素を取り上げる231～232頁の「『庚申縁起』対照表」、親鸞伝のバリエーションを示す223～245頁の「『御伝私考』構成一覧表」等に如実に表れているように、本論文では対象となる資料を丁寧に比較し、その多様さや関係性を整理した上で議論を進めている。また民俗資料に対しても198～199頁の「日光・赤城山麓神戦伝承一覧表」等に明らかかなように資料を博覧し、関連する伝承や俗信までを拾い上げる姿勢を持っている。このことは本論文が資料の詳細かつ実証的な解析の上に成り立っていることを示している。こうした目配りの周到さは文献、民俗の双方に及んでおり、本論文を特徴づけている。

第2に、扱っている資料の多様さを挙げたい。本論文では伝承とその記録類にとどまらず、多種多様な資料を用いて検討が進められている。それは例えば、刈萱の絵解きに関しては近世から近代にかけての地誌や名所案内や近代の絵入り本の活用(126～137頁)や、雲祥寺の地獄絵に関しては参詣者による『参詣記念帳』への記入内容に対する注目(165～168頁)等によく表れている。絵解き研究は絵画という視覚に訴えるメディアを主として文学研究の対象として大きく開かれた研究領域であるが、筆者はそれにとどまらず、さらに絵画と関連する社会的文化的な諸事象、諸記録との関係の中で考察を行なっている。こうした絵解きを特殊視あるいは絶対視せず、巨視的な縁起の展開との関わりを重視する方法の提示は本論文の大きな特徴といえることができる。

第3に、以上の点を支えているのは文字記録と民俗事象、机上の分析とフィールドにおける調査とを融合させようとする意欲的な姿勢であることを指摘したい。あとがきでも述べられているように(376頁)、本論文における考察は文献と民俗という視覚で貫かれている。これは、文字による記録資料が膨大に存在する日本の民俗学あるいは文化史研究においては当然ともいえる視角であるが、具体的な実践にあたっては、文学研究および歴史研究と民俗研究という成り立ちも問題意識も異なる領域を接合する学際的な姿勢を要するものである。机上と野外という全く異なる条件のもとで、それぞれの資料や事象の性質に即した解析が必要なのである。本論文では、そうした資料の根幹的な性質の違いを踏まえつつ、それら相互の架橋を縁起の成長や変容という視点で可能にした成果といえることができる。

本論文は、このように柔軟かつ徹底した姿勢で文献と民俗との両方の資料を積極的に取り上げて絵解きと縁起の展開を民俗文化史の中に位置付けたものである。以下、その意義について述べる。

第1に民俗学における伝説研究に対する貢献を挙げることができる。

伝説がモノ(事物)に付随するものであり、信仰を伴うものであることは民俗学において常識に属することであるが、従来、その生成過程についての論究は、口承文芸および説話文学の領域内にとどまってきた。本論文においては、開帳における「エトキ」という行為が、寺社が所有する宝物や縁起に関わるモノを開帳の場において物語、由来とともに人々の眼前に具体的に提示するものであったことが具体的に解明されている(56頁等)。さらにそれは絵画の中の世界ともつながっており、絵解きに登場したモノが同じ開帳の場に並べられている場合もあった(76頁)。それによって89頁で主張されているように、こうしたモノのエトキが、寺社の伝説となり、伝承されていく場合が少なくなかったであろう。伝説としても伝えられていく物語や説話、あるいは歴史認識が、開帳という「場」で再確認、編集され、モノと結び付けられていったと解することができる。そればかりではなく、開帳の「場」におけるエトキは、神仏に対する信仰を強化する機能を持っていた。伝説の

重要な要素である事物との結びつきや信仰的な要素との関わりがここでも見出すことができるのである。そのように考えたとき、本論文での議論は民俗学、口承文芸研究における伝説の発生の「場」を凝視した研究であることが了解できよう。このことによって、従来の口頭での継承や社会的な機能と言った方面に偏りがちであった伝説研究に、その生成過程の解明という新たな視点と可能性とを登録したと受け止めることができるのである。

このことは第2として、口承文芸における「場」への新たな省察も可能にするだろう。

縁起もしくは略縁起については、これまで仏教文学・唱導文芸の領域からのアプローチが行なわれてきた。本論文ではそうした研究を受けて、さらに縁起の展開、変容を具体的に考察する可能性を切り開いている。縁起は、本論文において、開帳という「場」をくぐり抜け、絵巻や掛幅画あるいはモノという視覚的な情報を加えることで話の長短、内容の難易などがさまざまに変動したことが明らかにされている。開帳は、民間における口承文芸の伝承の「場」とはやや異なるものの、十分に意識し参照すべきもう一つの「場」であった。開帳という「場」は唱導という意図のもとに周到に編みあげられてきたものであるのに対して、現代の口承文芸の伝承の「場」は、観光という文脈でも生命を保ち、また絵本や映像という口頭表現以外の媒体の中にも存在することは周知のことである。その点では開帳が前近代において現代の伝承の「場」を先取りしていたことが明らかである。こうした問題を、それぞれの時代の制約と資料の存在のありようとに即して分析、考察することについての方法的な可能性を本論文は登録したといえる。本論文によって伝承の「場」に関する議論が深化することが期待されるのである。

第3に絵解き研究に対する貢献も確認しておきたい。

本論文は絵解きと寺院絵画の現代における必要性和受容の様相を包括的に浮かび上がらせている。このことは筆者の目指した絵解きの民俗学的考察として重要な達成である。こうした考察はさらに、民俗文化あるいは庶民の生活等における仏教思想の浸透の解明へと進展してゆく可能性をはらんでいる。

本論文は特に第Ⅱ部において、伝統的な絵解きの再生や地方寺院の地獄絵の展観を通して現代に生きる人びとが、絵解きのなものを希求していることを提示している。これまでの絵解き研究は文学研究の領域からの調査や考察が多く、必然的に説話文学や唱導文芸などとの連関に関する成果が蓄積されてきた。もちろん、美術史の領域からのアプローチもあったし、歴史学における絵画資料論の提唱と実践も豊かな知見を蓄積してきた。広義の絵解き研究はそうした多様な学問のターミナルとしての意義を持つものである。そこには改めて、民俗学の方法とそれによる視野の広がりとを登録し、庶民生活における絵画表現の問題を形成、発信、重要、浸透といったさまざまな側面で追究する可能性が本論文によって提示されその具体的な作業例が提出されたといえるだろう。本論文の分析からは絵解きの通時代性や現代性を指摘することができ、日本における絵解き文化とでも言うべきもの

の生命力を読みとることが可能なのである。

本論文は、以上の報告のように、豊かな内容を持ち、方法論的にもすぐれたもので従来の研究を総括し、絵解きと略縁起に関する研究を新たな段階に押し上げた労作というべきである。また、本年2月1日に行なわれた口述試問と公聴会においても的確な応答と研究発表がなされ、本論文の研究的意義が証されたといえる。よって、本論文は文学研究科の博士学位論文基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。本審査委員会は全員一致をもって、久野俊彦氏の博士学位請求論文は、本学博士学位を授与するに相応しいものと判断する。